

映像作品に用いられた坂道の特徴～景観実態及び撮影方法を中心として～

(大山勲研究室) G20LRA02 XU RUICHEN

1. 問題意識

東京は、日本の都会の象徴として、さまざまな映画やドラマなどのコンテンツにロケ地として使われている。東京の特殊な地形によって、たくさんの坂道が現れたが¹⁾、それらの坂道は、主人公たちの生活の物語を表現する多くの映像作品の中に出現している。私のような日本の映像作品に興味ある外国人留学生にとっては、坂道は非日常的な存在であり、日本の独特な“生活の場”的魅力があった。

これら映像作品のなかに出現する坂道には、どのような景観特徴があるのかという問題意識を持った。

2. 研究の位置づけと研究の意義

先行研究を検索したところ、坂道の景観研究はみられたが^{例えば2)}、映像作品の坂道についての研究はほとんど無く^{注1)}、「映像作品に使用された坂道」の実態や景観の実態は明らかにされていない。

そこで本研究では、映像作品ロケ地に選ばれた坂道を研究対象とし、その景観実態を明らかにし、特徴を整理することによって、映像作品の対象になり得る坂道の基礎データを整理したいと考えた。

この研究の成果は、ロケ地に採用される坂道の共通特徴や撮影手法の特性を明らかにすることにより、東京だけでなく、他の地方でもロケ地として選定される新たな坂道の発掘のための情報を提供することができ、地域活性化や観光促進への知見を示すことも期待できると考える。

3. 研究目的

研究対象地を「ロケ地に選ばれた東京の坂道」とし、その景観および映像撮影の実態として、以下の3点を明らかにする。

- ① 映像作品に選ばれた坂道の景観特徴
- ② 映像作品における坂道の撮影手法（景観の切り取り方・見せ方）
- ③ 坂道ロケ地の誘致方策の考察と提案

4. 研究方法

4-1. 研究対象坂道の抽出

多数の映像作品に使われている坂道を抽出する。ロケ地情報をまとめた「全国ロケ地ガイド」³⁾では、各坂道の全ての映像作品が整理されている。そこで、この情報をもとに多くの作品で使われた（ここでは5つ以上の作品に使用されたものとした）18ヶ所の坂道を抽出した。

次に「坂道が作品の中で主要なロケ対象ではない」「対象地が坂道（勾配5%以上^{注2)}）と判定できない」「坂道でなく階段である」箇所を除外した。

その結果、9ヶ所の坂道を対象とし、そこでの映像作品100個のシーンを対象とした。

4-2. 景観実態の調査の方法

目的1に対して、対象の9ヶ所の坂道の景観実態を調査した。調査項目は以下の通り。

i 景観の物理的特徴

- ① 勾配（国土地理院データで計測）
- ② 頂点からの眺望（現地調査で眺望対象、水平視角・垂直視角を把握）

ii 景観の質的特徴

- ① 歴史由来（ウェブ資料による）
- ② 保全状況（ウェブ資料による）

4-3. 映像の撮り方の調査の方法

研究目的2に対し、撮り方の指標として次の6つの指標を取り上げ把握する。

映像作品を視聴し、その映像を現地調査で確認し同じ画像になるように撮影し、その時の撮影条件を計測することによって各指標を把握する。

- ① 「焦点距離」：レンズ焦点距離、広角～望遠まで「mm」で表示される
- ② 「撮る位置」：坂道の「上/中/下」
- ③ 「カメラアングル」：「水平/上向/下向」
- ④ 「構図」：シーンの画像中で「坂道路面/沿道/眺望（遠景建築）/空」の面積割合
- ⑤ 「不可視領域」：不可視領域の「有/無」（不可視領域のあるシーンが少なからず見られたためこの指標を取り上げた）
- ⑥ 「時間」：シーンの撮影時間「昼/マジックアワー/夜」

また、「撮影シーンと物語の関連性」を把握するために、

- a) 「坂道シーンの中で主要人物により物語の展開が起こっている（物語と関連がある）」
- b) 「物語の中で単に生活場所の提示のために坂道が使われている（物語と関連がない）」

の2種類のどちらかに該当するかを把握する。

4-4. データ分析の方法

研究目的1と2に対し、各調査データ単純集計、および項目の間の関連（クロス集計）によって分析する。さらに、映

像に取り上げられる坂道の景観とその景観の切り取られ方は多様で複雑であるが、典型的な特徴を理解するために数量化III類分析を行って多数の変数を小数の潜在変数に要約し、さらに数量化III類のサンプルスコアを用いて、クラスター分析を行い、坂道撮影のパターンの類型化をおこなう。

5. 結果

5-1. 映像作品に使われる坂道の景観実態

研究目的1に対する、景観実態の計測および分析の結果の概要を述べる。

（1）勾配

9つの坂道の中で7つの坂道の勾配が10%以上であった。シーンの数で計測した勾配の分布を図1に示す。最も使用される坂道の勾配は10%～13%であり、次に多い勾配は14%～17%であった。一般に10%以上は急坂と見なされるため、急坂の坂道が使用される傾向がある（シーンの88%が10%以上の勾配の坂道で撮影）。

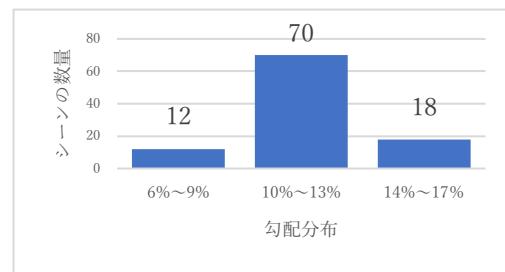


図1 シーンの数量で計測した勾配の分布

（2）眺望

1) 水平方向視角

シーンの数で計測した水平眺望可視角の分布を図2に示す。

眺望景観の水平角は20度以下と21度～60度の坂道が多い。沿道建物景観に挟まれ遠くに60度以下で見える眺望景観である。その程度の眺望でもロケ

地として可能ということでもある。

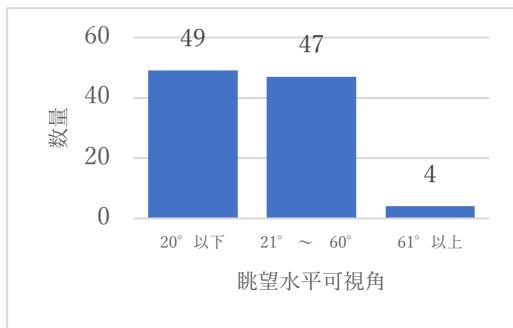


図2 シーンの数量で計測した水平眺望

2) 垂直方向視角

図3はシーンの数で計測した最大俯角の分布である。

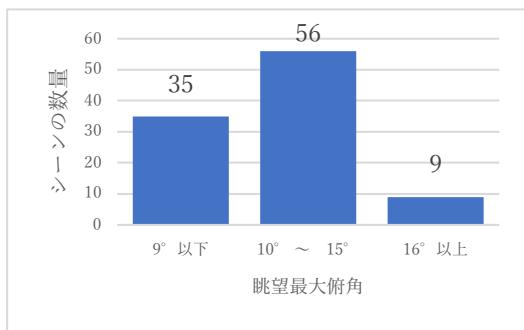


図3 シーンの数量で計測した垂直眺望

最大俯角10度以上が65%を占める。俯角10度以上は景観工学からすぐれた眺望の要件と指摘されており⁴⁾、垂直方向において、坂道頂上の眺望視対象が人の目に認識やすい坂道がロケ地として選ばれる傾向があると考えられる。

5-2. 坂道の撮影手法（景観の切り取り方・見せ方）

研究目的2に対する映像の撮り方の分析は以下の通りである。

(1) 撮影位置、アングル、焦点距離

シーンの数で計測した焦点距離の分布を図4に示す。135mm以上の望遠のシーンが多用されており、望遠レンズで撮影する傾向がある。撮影位置とアングルは、

坂上から下向きのシーンが最も多かった。

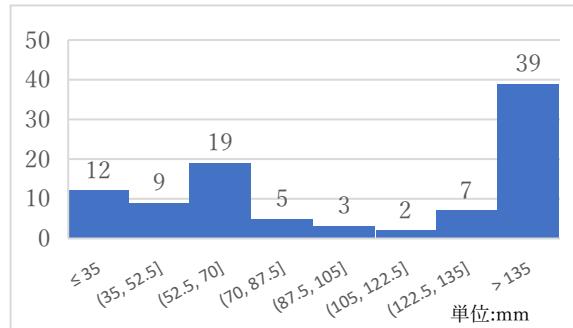


図4 シーンの数量で計測した焦点距離

(2) 不可視領域

坂上から下向きで撮影した67個のシーンに、特殊な撮り方である「不可視領域：有」のシーンは23個もあり、全体シーンの3割以上占めていることが見られ、また、対象の9つの坂道のうち、不可視領域を映像に用いた坂道は7つもあった。

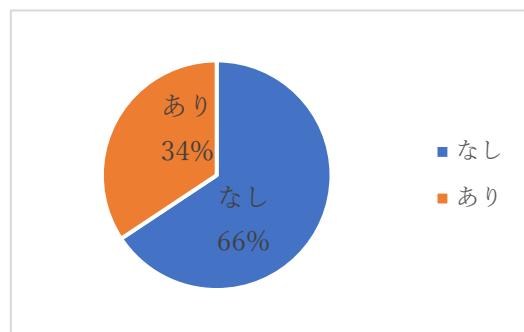


図5 不可視領域有無の集計

(3) 構図、時間天候、物語との関連性

以下3点の結果が得られた。

- ① **構図**：坂道のシーンは「坂道（道路路面）」だけではなく、特に「沿道」が構図の多くを占めていた。さらに「眺望」「天空」がシーンによっては重要な構図要素となっていた。
- ② **時間天候**：昼およびマジックアワーで撮影する傾向がある。
- ③ **物語との関連**：坂道のシーンは物語の展開と関連があるシーンが78%あり、坂道は物語との関連性が高い。

5-3. 坂道の撮影パターン

数量化III類によって、23個の変数が5つ潜在変数（軸）で概ね説明され（累積寄与率 60.2%）、クラスター分析によって100個のシーンは9つのクラスターに分類することができた。

坂道の撮影パターンに関して以下3つの結果が得られた。

- ① 坂道撮影のパターンは複雑で多種多様であり、撮り方によって多様な景観演出がみられたが、多変量解析によって、9つの撮影パターンに分類することができた。シーンの数が最も多いパターンを代表する再現写真を図6に示す。



図6 シーンの数が最も多いパターン

- ② 撮影パターンにおいて、「坂上」「焦点距離:望遠」と「不可視領域:有」が多くのクラスターに出現していて、重要であると考えられる。
- ③ 構図において、どの撮影パターンでも、坂道路面のみを強調するパターンは少なく、坂道沿道・眺望・天空のいずれか、または複数の要素が構図に入っている。特に沿道景観が重要であり、加えて眺望景観と天空（開放性）が構図の重要な要素であると言える。

6. 結論と考察

映像作品に選ばれた坂道の景観特徴

（目的1）、映像作品における坂道の撮影手法（景観の切り取り方・見せ方）（目的2）を明らかにした（5章）。

本研究の成果を活かしてロケ地誘致に選ばれる坂道の条件を整理すると、次の要件が示唆される。

- 1) 坂道上からの眺望が優れている坂道（勾配 10%以上、眺望視野角：俯角 10度以上、水平視角 20度以上の眺望景観を有する、不可視領域を出現できる縦断線形と道路直線延長を有する）
- 2) 地域の個性的な沿道景観を持つ坂道

「参考文献」

- 1) 皆川典久「スリバチとは何か?」, <http://matogrosso.jp/suribachi/r01.html/>
- 2) 長井由隆・川崎雅史（1989）, 「輪郭線のラフスケッチによる街路景観の基礎的評価」
- 3) 全国ロケ地ガイド：ドラマ・映画・特撮の撮影場所案内, <http://loca.ash.jp/>
- 4) 樋口忠彦（1987）「景観の構造」技報堂出版

「補注」

注1) 浅野 純一郎（映画作品を通して見た信州上田の景観資源の特色～映画ロケ地としての実績を生かした都市景観整備に関する基礎的研究～）はロケ地の景観分析をおこない、その中に坂道が取り上げられることを指摘しているが、坂道の景観の分析はない。

注2) 景観工学の「坂道に見える勾配」を引用（Kevin Lynch(1971) Site Planning, Second Edition, The MIT Press（山田学訳（1987）「敷地計画の技法（新版）」, p. 73））して勾配が5%以上の坂道を対象として抽出した。